

## 【報告】

## ・【CIEC 第 113 回研究会報告】

テーマ：学びのコミュニティの場：ラーニング・コモンズ  
～アクティブ・ラーニングを支援する学びの空間づくり～

日 時：2017年10月22日(日) 13:00-16:00

会 場：京都女子大学新図書館

## ・【PCカンファレス北海道2017報告】

テーマ：～学習支援システムと教育の国際化～

日 時：2017年10月28日(土)・29日(日)

会 場：室蘭工業大学 教育・研究1号館C棟2階

## ・【2017九州PCカンファレンス in 北九州報告】

テーマ：九州からはじまる新しいカタチ ～地域・環境・グローバルの視点から～

日 時：2017年10月28日(土)・29日(日)

会 場：北九州市立大学北方キャンパス

## 【CIEC 第 113 回研究会開催報告】

テーマ：学びのコミュニティの場：ラーニング・コモンズ  
～アクティブ・ラーニングを支援する学びの空間づくり～

開催日：2017年10月22日(日) 13:00 - 16:00

会場名：京都女子大学新図書館（京都府京都市東山区今熊野北日吉町35）

プログラム：

13:00-13:05 開会挨拶・趣旨説明

13:05-13:40 施設説明・見学

五十嵐勇氏（京都女子大学 図書課長）

13:40-14:40 講演 ラーニング・コモンズ：多様な学びを支援する空間

福永 智子 氏（相山女学園大学文化情報学部文化情報学科教授 図書館長）

15:00-15:50 質疑応答およびディスカッション

司 会：尾池 佳子（八王子市立下柚木小学校・CIEC 小中高部会世話人）

## 【開催報告】

プログラム前半は、京都女子大学図書課長五十嵐勇氏による施設説明が行われた。図書館改築にあたり、滞在型の図書館、長くとどまって学べる空間の創造が大きなコンセプトとなっていること、知恵の蔵と呼ばれる従来の図書館空間と交流の床と呼ばれる、活発に活動できる学習空間とのゾーニングを行なっていることが特徴であると述べられた。交流の床の1階ホール（写真1）は公開講座やプレゼンテーションが行える空間になっていて、同じフロアにはアクティブラーニングコモンズ、地下1階にはメディアコ

モンズ、2階には飲食も可能なカジュアルスタディスペースが用意されている。図書館改築のコンセプトとフロアの特徴の説明後、施設見学を行った。



写真1：交流の床1階ホール

交流の床1階奥にはアクティブラーニングコモンズ（写真2）が設置されている。またアクティブラーニングコモンズの壁面には情報検索用のノートパソコンが設置されている（写真3）。また、地下には自動化書庫があり約60万冊収蔵できる。

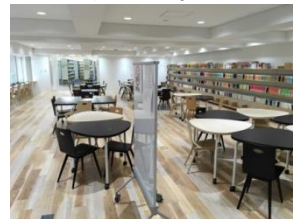


写真2：アクティブラーニングコモンズ



写真3：情報検索用PC

地下1階にはメディアコモンズ（写真4）が用意されていて、視聴覚機器の利用が可能であり、学生がプレゼンテーションできるようにモニターなども用意されている。学生がグループワークをする際に自由に移動できる机と椅子を配置されている。またガラスで区切られたメディアルー

ムが2室用意されている（写真5）。



写真4：移動可能な机と椅子 写真5：ガラスで区切られたメディアルーム

交流の床と隣り合う、別棟には知恵の蔵と呼ばれる従来型の図書館（写真6）があり、静かに検索したり、資料を調べたり、閲覧したりする空間になっている。自動貸出機を導入したことにより、リファレンスサービスなど対面サービスに注力できるようにしたことが特徴である。

交流の床 2階はカジュアルスタディスペースと呼ばれる空間で、ここでは飲食もディスカッションも自由に行うことができ、若い人の学習スタイルに合わせた空間を提供している（写真7-9）。カジュアルスタディスペースに設置されているカフェは学生により運営されている。

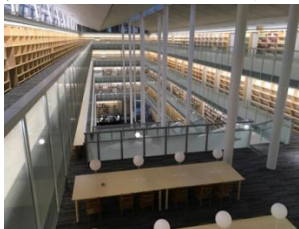


写真6：知恵の蔵4階 写真7：カジュアルスタディスペース



写真8：カジュアルスタディスペース 写真9：学生が運営するカフェ

プログラム後半では、椋山女学園大学文化情報学部文化情報学科教授で図書館長の福永智子氏から「ラーニング・commons: 多様な学びを支援する空間」について講演があった。ラーニング・commons登場のきっかけとして「学術情報の電子化・学士課程教育の質的転換・大学生の学びの変化」の3つが考えられると述べられた。1つ目の学術情報の電子化では、情報源が従来の紙媒体とデジタル情報（ネット+有料DB等）になり、情報検索が複雑化したこと、2つ目の学士課程教育の質的転換では、成熟社会において求められる資質として、答えのない問題に対して解を見出していく批判的・合理的な思考力、チームワークやリーダーシップを発揮して社会的な責任を担う能力などの学士力が求められること、3つ目の大学生の学びの変化では、学生が24時間インターネットにつながり、PC等を所持していく中で、学習のスタイルがグループワークで行うものが増えていることや論文等のライティングサポートへの対応をしていく必要があることがラーニング・commons登場の背景になっている。

次に、ラーニング・commonsの要件として必要なことが

挙げられた。第1に物理的な要素として、PC、無線LAN、プロジェクタ、プリンタなど電子情報にアクセスできる機材、可動な机、椅子、間仕切り、ホワイトボードなどグループ学習に対応する会話可能な空間、カフェ等の設置、飲料可能にすること、お手洗いを綺麗にすることなど滞在型図書館にすることがある。第2に人的支援として従来通りのリファレンスサービスに加えて、ライティング支援やコンピュータ支援など大学院生等が常駐して、資料探し、プレゼン、レポートの執筆にいたるまで学生の学習活動の疑問に答えることが必要である。ラーニング・commonsの設置場所を館内に置くか、館外に置くかは重要な問題であり、図書館内にcommonsを設置する意義や問題点について提起された。問題点としては、「学部学生の学習にはデジタル情報だけでは不十分であり、従来の紙媒体資料も使える環境が必要であること。commonsをつくっても、コピーでレポートを書くようでは本末転倒であること。レポートの書き方を高校まででしっかり習っていない学生が多いため電子情報と紙媒体資料の両方について情報収集や利用の支援が必要であること。」などが挙げられた。

続けて、ラーニング・commonsが提供する空間の新しい機能について3点述べられた。1つ目は学生の自主学習の場になること、2つ目はアクティブラーニングのための新たな教室空間になること、3つめは大学における居場所をつくること。高校生までと異なり、大学生は決まった居場所がなく、学内のどこかを移動している。図書館が大学生生活の場になる機能を果たしており、椋山女学園大学では3つめの機能を果たしていることが多い。

ラーニング・commonsの実際について、平成26年3月に設置された椋山女学園大学の取り組みを紹介された。椋山女学園大学では地上が会話空間、地下が静寂空間と住み分けされており、1階にラーニング・commons、ラーニングエリア、ブラウジングコーナー、AVコーナーが設けられている。2階では絵本コーナーがあり、保育や司書課程の学生が読み聞かせの練習などで利用が可能となっている。またリーディングエリアではグループで資料を広げ作業ができるようになっている。3階はリファレンス室になっていて情報検索用PC等が設置されている。また6-8人で利用可能なグループワーク室が設置されている。一方、静寂空間として地下1階と2階があり、地下1階のラーニングエリアは1席ずつ仕切りがされ、静かに勉強するエリアになっている。椋山女学園大学のラーニング・commonsでは、図書館ツアーとデータベース講習会が行われている。ラーニング・commons設置後の利用状況は貸出冊数、入館者数とも増えてはいるが、劇的には増えていない現状がある。ラーニング・commonsの評価については、「リラックスできる、作業しやすい、雰囲気が良い、充電ができる、水分が取れる」、また女子大の傾向として「他人の視線が気にならない」などがある一方、「うるさい、本が使いにくい、雰囲気がよくない」など改修前を知る上級生からの意見もあった。ラーニング・commonsを設置したことにより着座行為率が増加したこと、個人学習の場の選択肢が増えたことなどの変化が見られた。施設上の問題点以外にも教学や教務委員会との連携が必要なこと、全学的な協働的な取り組みをしていくことでラーニング・commonsとしての機能が向上していくと結論づけられていた。

講演後のパネルディスカッション・質疑応答では、五十嵐氏から、図書館が好きな人には静かに勉強したい、本を

読みたいという人もいるので、コモンズが作られ能動的な活動が行われることを嫌う人がいる。そのため利用者に配慮した音のコントロールの苦慮しながら共存をはかっていることが述べられた。また福永氏からはラーニング・コモンズを運営していく上で学生からの意見の紹介や教学や教務との調整やアクティブラーニングを進めていく上での課題などが述べられ、研究会は終了した。

(文：森棟隆一 白百合学園中学高等学校・CIEC 小中高部会)

## 【PCカンファレンス北海道2017報告書】

PCカンファレンス北海道2017が10月28、29日に室蘭工業大学で開催された。

初日の特別講演について報告する。

1)「LMSを使った足場かけを通じた協同学習」ハグリー・エリック：室蘭工業大学

足場かけにより、学生の国際交流を円滑にした、ということが要点である。その際、教師の段階的指導にLMSが大きな働きをし、学生の学習意欲と英語力向上に繋がった。また英語で文化紹介をすることで自国の文化を深く知るようになり、「他国の文化を尊重し自国の文化への理解を深める」というグローバル人材育成への足掛かりとなった。

氏は、「どの科目を学習する場合でも、いきなりハイレベルな問題から始めると混乱が生じ、学生のモチベーションも下がる。学生に達成感を味わってもらいたいならば、教材や教育方法選びが非常に重要となる。「足場かけ」を上手に利用すれば、ビギナーからハイレベルの学生までそれが可能となる。」ということを具体例を示しながら述べられた。

発表では、英語が苦手な学生を国際的なオンライン交流に参加させる際の「足場かけとしてICTの活用」について説明し、その後、3年間にわたって実施中の国際バーチャルエクステンションの紹介がされた。日本国内28大学（現時点で31大学）と3ヶ国の学生とが英語でオンライン交流を行い、高額な旅費も必要とせず海外の学生とつながる。さらに、その交流活動も協同プロジェクトへの参加（協同学習）も可能とするものである。2点の効果：異文化間コミュニケーション能力育成、現実世界におけるコミュニケーションに際して必要な言語スキルを磨くチャンスが学生に与えた。

昨今国際交流は盛んであるが、Moodleを用いての教材提供、話し合いの場、各自の作品のアップロードなどが可能で、アンケート調査からも「この活動は魅力的で国内外の仲間づくりでき、これからも継続していきたい」という声があがっている。

2)「高大接続におけるICTを利用したグローバル人材育成教育」川名典人：札幌国際大学

近年、高大接続の必要性が強く求められているが、実施がなかなか困難でさまざまな課題が指摘されている。

札幌国際大学は平成26年に「観光教育の充実に関する高大・地域連携協定」を北海道斜里高等学校と結び、斜里高等学校と将来の地域を担う人材を育成することを目的として多彩な教育活動を行なっているが、本発表では札幌国際大学観光学科の学生と斜里高等学校との連携の成功例が紹介された。活動を行うためのツールとしてICTを利用し、そのことで継続的な学習が可能になり、ICTを通して

情報の収集、共有、そして発信の仕組みを学ぶことでグローバルな思考力が身につくことも非常に重要な点である。知床の観光スポットを紹介することをトピックとして行った活動を具体例としてあげられ、過去3年間実施された観光英会話集中セミナーや大学と斜里高校の間で実施したオンライン英会話レッスン、そして外国人観光客をターゲットとしたデジタル観光案内書の作成手法を紹介された。大学からは高校へ機器iPadが提供された。学習支援サイトを開設し、学生はiPad miniを使用して交流活動を進めた。アンケート調査からは、相手に伝わる英語を用いてのプレゼンを繰り返し改良されていくので英語の力の向上の手ごたえを感じたこと、障害を感じず進めつつ学びたい、など好意的な回答があった。氏は、継続していくためには核となる同じ教諭が不可欠であることも力説された。(文責：吉田晴世 大阪教育大学)

1日目は特別講演に加え、ワークショップとITプレゼンが行われた。ワークショップは「プログラミングってなんだ？ -Swift Playgroundsで学ぶプログラミングはじめの一歩-」と題してCIEC外国語教育部のメンバーでもある北海道大学の田邊鉄先生が講師を務められた。

いよいよ小学校で開始されるプログラミング教育を念頭においた企画で、一番聞いてほしかった室蘭市内の小中学校の先生の参加もあり、「とても参考になりました」とのうれしい感想をもらうことができた。

また、ITフェアに出展頂いた企業によるITプレゼンでは最新のIT教育機器の紹介があり興味深い内容の報告が行われた。

1日目の終了時には、室蘭工業大学生協の全面的なバックアップにより生協食堂を会場に懇親会を行い、北海道、北海道以外の参加者にITフェア出展企業の方も加わり、約40名の参加者による交流が繰り広げられた。

2日目は分科会が行われ、「e-Learningとデジタル教材」、「初等・中等教育の現状と課題」、「プログラミング教育」、「教育システムの開発と分析」の4つのカテゴリーわけによる、17本の発表があった。このうち、7本は北海道外からの発表であり、PCC北海道がCIEC会員に定着していることを強く感じた。分科会発表のうち、学生、大学院生を対象に「プレゼンテーションスキル賞」を毎年選出しており、今年度は「IchigoJam用ビジュアルブロックエディタを用いたプログラミング体験教室の実践」を発表した、大阪工業大学大学院情報科学研究科 鴻池泰元氏に贈られた。両日の参加者は約70名だった。(文責：森夏節 酪農学園大学)

## 【2017九州PCカンファレンス in 北九州報告】

2017九州PCカンファレンス in 北九州が10月28日(土)～29日(日)にかけて北九州市立大学北方キャンパスにおいて「九州からはじまる新しいカタチ～地域・環境・グローバルの視点から～」をテーマに開催された。

初日は実行委員長柳井雅人北九州市立大学副学長による開会挨拶に引き続き、岡秀樹氏(コワーキングスペース秘密基地代表、一般社団法人まちはチームだ代表)による基調講演I「公(パブリック)と私(プライベート)」で幕を開けた。

北九州市小倉で「コワーキングスペース秘密基地」や「知見と体験のシェアリング」をミッションに掲げる学びの場

「創生塾」を運営し、街づくりのデザインも手掛ける岡氏は、「ストリート」という共通財産を向上させることが店舗（個人）の成功成長につながることを事例を挙げながら解説し、土台（プラットフォーム）を向上させ全体を浮上させる上でCSV (Creative Shared Value 共通価値創造) が重要であること、それに反して現状では効率化の名のもと公と私に分断されていることが多いこと、その分断を避けるには公と私の間である中間領域を設定し創発を準備することが重要だがそれができる人材が足りないことを指摘し、その人材育成のためにはじめた「創生塾」について紹介した。

また、重要なのは公と私の二項対立に持ち込まないことであり、そのコツは中間領域をデザインすること、そして共通価値に目を向け分断を脱して融合し共通価値が向上するとき公 (Public) は新しいフロンティアになると講演を締めくくった。

引き続き、IT フェアが行われ、39 の出展者による最新の ICT 機器やサービス、教材類の展示、説明が繰り広げられた。

続くシンポジウム「電子教科書を活用した授業から考える学生の学び方の将来性」では、電子教材を授業で活用している九州工業大学情報工学研究院の小田部荘司教授が「使った教員」、その授業を受講した九州工業大学情報工学部学生の権藤昌之氏が「学んだ学生」、ビューアーの開発に携わっている大学生協東京事業連合電子書籍事業推進課の森川佳則氏が「作った担当者」、生協 PC 講座で電子書籍を教材として用いる九州工業大学大学院生で生協 PC 講座スタッフの土橋智矢氏が「使ったスタッフ」として登壇し、それぞれの立場から電子書籍の活用法、実際に使ってみた経験や感想などを紹介し、会場との質疑応答や意見交換を行った。

司会を務めた筆者（北村）の印象に残った点は、(1) 通学時の持参物が減る、教科書内/教科書間の検索が可能となるといったメリットは学生から歓迎され、それらは紙媒体を電子書籍化するだけでも提供できそうなこと (2) さらに電子書籍利用を前提とした授業デザインをすることで授業のライブ感やインタラクションを増すことができそうなこと (3) 電子書籍を利用している登壇者は立場は違うもののそれぞれ楽しそうだった、といった点であった。

2 日目は 4 つの分科会が行われた。分科会 A～C では教育現場や地域創生における ICT 活用を中心とした 15 の発表、分科会 D では PC 講座として提供する価値から見直し、今後の PC 講座を考えるワークショップ「ポスト『PC 講座』を考える」が行われた。

2 日目の最後にはカンファレンスの締めくくりとして北九州市立大学外国語学部の伊藤健一教授による基調講演Ⅱ「英語と日本人：これまでとこれから」が行われた。クリスマスの本来の意味と日本での扱われ方のギャップに代表される文化的な差違、英語の語源から振り返るヨーロッパの歴史、英語と各国の歴史・文化の関係を解説した上で、我々日本人が英語と今後どのように関わりあっていけばよいのかを延べ、質疑応答では講演に触発された会場の学生から今後の英語学習のしかたについてアドバイスが求められた。

こうして九州 PC カンファレンス in 北九州は 150 名を超える参加者を得て幕を閉じた。テーマとして掲げられた「九州からはじまる新しいカタチ」を感じられる 2 日間で

あった。

来年度の九州 PC カンファレンスは PC カンファレンス (全国版) を兼ねて 2018 年 8 月 24 日 (金)～8 月 27 日 (日) に熊本大学を会場に開催される。

文責：北村士朗 (熊本大学教授システム学研究センター、熊本大学生協理事、CIEC 副会長理事)